

の前後によりて主従を定むるならば、我人の初に知るものは目前の家財道具、或は山川草木の如き、許多の元素分子の相集りて出来たる複合體にして、元素或は分子の存在は餘程後に知るべきものであるから、複合體が主にして分子元素は従なり、分子元素は複合體より生じたるものにして、複合體が分子元素より生じたるものにあらずと断定すると同様であります。豈不都合千萬の論法ではありませぬか、然らば唯物論者は又必ず一問を起して、此世界には勢力獨り存して、物質は初より存せざる様に解するは如何と尋ねませう。余は之に答へて、物質は勢力の現象なりと云ふのみにて、決して我人の感ずる所の色聲香味觸の五境より成れる物質を皆空なりと云ふのではありませぬ、尙ほ其意を敷衍すれば、宇宙に活動せる世界の大部分を我人の感覺を以て眺めたるに、物質の狀態を現するものなれば、勢力の外に別に物質の體あるに

あらずして、物質は勢力の現象に外ならずと云ふのであります。更に又一問ありて、理學者の研究する所によれば、此に物質あれば必ず勢力あり、此に勢力あれば必ず物質ありて、物を離れて力なく、力を離れて物なしと云ふ以上は、物質と勢力とは並ひ存せざるべからずと申すものがありません。余之に答へて、物を離れて力なく、力を離れて物なしと云ふ事と、物質は勢力の現象なりと云ふ事とは同様の意を以て解することが出来ます。即ち物質は勢力の現象なれば、勢力は物質の本體であるから、象を離れて體あるべき理なく、體を離れて象あるべき理なく、此に象あれば必ず體あり、體あれば必ず象ある道理であります。理學者は物質と勢力とは二にして一にして二なりと云ひませうが、余も矢張體と象とは一にして二にして一の說であります。又一問ありて、物質と勢力とは不一不二の關係を有する以上は、二者對等平權と見て宜

い、左すれば一方に於て勢力を本體と定むるを得ば、他方に於て物質を本體と立つるを得べき道理であると申しませう、余之に答て物質は、象にして本體にあらざる所以は、前に述べたる道理にて已に明瞭なる筈であります、若し其他に「證明を要するならば、世界の「大化」に就て考へて見るが宜い、即ち勢力の活動如何に應じて物質其状態を異にするは、恰も水體の流動如何に應じて波其形状を異にするか如き有様であります、若し又物質は生物の感覺の異なるに應じて一定せず、人類の見て物質と認むる所と、禽獸魚蟲の認むる所と各異なること明かなれば、是非之に現象の名を與へなければなりません、尙其外にも物質は現象なりとの説は、唯心論の方に古來色々證明せるものあれば、余は之を勢力の現象なりと論定致しました、

斯く論定して勢力其物を考ふるに、是れ絶対無限の體なるに相違ない

其際は無邊の空間無限の時間に亘りて無邊無限の大化をなすものなれば、其體亦無邊無限、即ち絶対なるべき筈であります、既に絶対無限なれば、平等唯一にして差別あるべき理なきも、其活動して大化を爲すに當り、表面に活動の相を示すは恰も海波の動搖するに當り、高低大小の波様を現するが如きものと考へます、此相を我人の感覺より観るときは、千差萬別の物象、即ち我人の所謂物質を認むることと思ひます、故に勢力其物の本體にありては、絶対唯一の體なれども、其現象たる物質の方にありては、相對差別を現することと心得て差支ありません、暫く此説を勢力大化論、或は唯力一元論と名けて置きませう、而して平等の勢力海に差別の波相を現はしたる所以は後に述ぶる積りであります、

第十九回 因果論

借て勢力は世界大化の原因にして、物質は勢力の現象に過ぎぬ所以を
 證明し了りたれば、是より因果の規則を論述せなければなりません。今
 日の世界に於て前の世界と後の世界との事を知るべき唯一の手掛
 りは、物質不滅勢力恒存の理法であると申して置いたが、其外因果永
 続の規則が矢張世界の前後に亘りて存するものであります。此規則を
 今日の世界就中世界の標本たる此地球に當りて前後を推考すれば、過
 去の世界の有様も未來の世界の状態も知了することが出来ます。日本
 と亞米利加との間は太平洋と云へる地球上第一の大洋によりて隔て
 らるゝも、今日は汽船の力によりて容易く航海することが出来、地球と
 星界との間は幾千萬里の空間を以て隔てらるゝも、望遠鏡の手立によ
 りて觀測する事が出来る如く、幾萬劫と限らなき久遠なる歲月を以
 て隔てらるゝ過去無數の世界の事も、未來無數の世界の事も、因果の流

船或は因果の望遠鏡によりて達することが出来るとは、セツ／＼不思
 議の事ではありません。せぬか、又平等絶對の大勢力の表面に千差萬別の物
 象を現はすに至る所以も、千變萬化の状態を示すに至る所以も、皆此規
 則によりて證明することが出来ます。故に此規則は哲學者に取ては天
 文學者の望遠鏡に於けるよりも、航海者の汽船に於けるよりも、一層大
 切の道具であります。若し其道具が世間より買入れるものであるなら、
 定て莫大の高價にして、余輩の如き貧賤の手に落つる筈なきに、生來自
 然より賜はりたるものなれば、一文拂はずに我有となり居るとは、此位
 な難有事はありません。

此因果の規則は今日の世界上盛に横たも、遍在恒有して、勢力の動
 所物質の現する所に存せざるなく、到らざるなく、實に宇宙の大注と稱
 して宜い、斯る恒有遍在の理より之を推すに、宇宙の大勢力に固執せら

規則なることは明瞭と考へます、即ち物質は勢力の現象、因果は勢力の規則にして、世界の大化は勢力物質因果の三者の關係によりて行はると申して宜い、是より世界の標本たる地球に就きて因果の規則を考ふるに、今日の天氣の晴雨は一結果にして、其原因は前日にありて存するに相違ない、即ち前日の温度風位日光水氣等種々の事情が原因となりて、今日の晴雨の結果を定むるに至るは疑ありませぬ、又前日の晴雨も一結果にして、其原因は前日の前日にありて存し、其前々日の晴雨の原因は又其前にありて存する以上は、今日の天氣の晴雨は地球の始否世界の初より因と果との前後接続して、其間一髮一毛の間断なき一條の連鎖より定りしに相違ありませぬ、獨り天氣のみならず、目前に現る一切の變化は、此因果の連鎖不斷より起ります、例へば我々が今日發病せりと假定するに、其原因は昨日にあり、昨日の原因は一昨日にあり、

一昨日の原因は、其前日にありとして前に溯らば、今日の發病の大元たるべき原因は、世界の太初に於て存せりと申して宜い、然のみならず我人の一舉手一投足すらも、其原因は太古に於て定まり居ることが分ります、果して然らば因果の永續は勢力恒存の理法と同一に確實にして、一切の變化を起す所の原理なることは明かであると思へます、是より前世界の事情を考ふるに、今日の世界は一大結果なれば、其原因は前世界にありて存する筈である、猶ほ今日は一結果にして、其原因は明日にあると同様の道理であります、已に因果は勢力固有の規則なる以上は、勢力の活動する限りは、此規則の行はるゝに相違ない、而して今日今時の原因は漸々溯りて世界の太初、星雲の當時に存するを知れば、星雲當時の原因は前世界にありて存するは必然の事と考へます、若し星雲の前に世界なしとなさば、星雲の由て生じたる所以及び星雲の開

發する所以を説明することが出来ませぬ、苟も因果の規則存する以上は、星雲の前に世界ありしは決して疑ふべからざる事實と信じます、サウして見れば此世界全軌の原因が前世界にありて存するは言ふ迄もなき事でありませぬ、斯くして己に今日の世界の原因は前世界にあるを見れば、前世界も亦一結果にして、其原因は前前世界にありて存し、前々世界も亦一結果にして、其原因は又其前にありて存する筈、此の理を推して古に溯らば、今日の世界の原因は無数の前世界を経て無始の始めにありて存することが分ります、果して然らば前世界の事は勿論、前々世界の事も其前の無数世界の事も、皆今日の結果を見て推測することが出来ますが、實に因果律の應用の廣大なるは唯驚く計りてあります、余はこれを哲學者の前世界を觀測する唯一の望遠鏡と考へます、此因果律に附隨して習慣性の存することを知らなければなりません、

此習慣性とは物理学の所謂習慣性と同一なるも、余は一層廣き意味に之を用ひ、勢力活動より生ずる規則の方を因果律と云ひ、性質の方を習慣性と名くる積りであります、若し之を生物学の上に考れば、遺傳性と名けても差支ありません、例へば地球が遠心力、求心力の關係よりして太陽の周圍に軌道を畫きて、百度參りや二百度參りどころではなく、無數回運行して其則を亂るとなきが如きは、余が所謂習慣性が存するからであります、若し此習慣性がないならば、地球が急に運行を止めるか、も知れず、或は此頃の流星の如くに軌道を外して脇道へ走り出すかも知れず、其様の事が萬が一にもあつたら、夫れこそ大變、日清戦争や三國同盟などを彼是言ふて居られませぬ、然るに幸なる哉、習慣性の存する爲に一たび始たる運行は、永く之を繼續して四時の寒暖も其期を誤らぬ様になり、五穀の生熟、生物の繁殖、人類社會の隆盛を見る様になるの

であります、又我々人類或は生物が其親祖先の形状を相續し、幾代を経るも大抵同一の事情を反覆し、人類が變じて牛馬となり、牛馬が變じて人間となることなく、人壽五十年乃至百年を常則とすれば子々孫々中に其則を破りて、五百年千年の長壽を得るものなき等は、之を遺傳性と云ひますが、矢張余が所謂習慣性であります、今勢力が因果律を追て活動する中、此習慣性を繼續し、同一の状態を反覆しながら進行するものであります、其例は世界の大化が星雲より始りて漸く進化し、進化窮りて漸く退化し、其極元の星雲に歸し、一進一退一開一合する順序は、此世界のみならず、前の世界にも後の世界にも前後殆んど無數の世界に於て反覆するを見て知ることが出来ます、既に大化の大波が習慣性を繼續すれば、其間の小波も亦之に従ふて同一の順序を反覆して、以て大化其物を完了するに至ります、斯る習慣性の起る原因は、全く勢力恒存因

果永續の理法に本づくことは申す迄もありません、又此理法は此世界のみならず、過去の世界にも未來の世界にも行はるゝものなれば、今日の世界の上に見る所の大小の進化及退化の順序及状態は、過去の世界の習慣を繼續することか分ると同時に、今日の世界の進化を見て過去の世界の進化を測ることは無論出来る道理であり、又前に考へて然る以上は、之を後に及びして未來の世界の變化する順序及び状態が同く分る道理であります、換言すれば過去の世界の状態を今日に遺傳し、今日の世界の状態を未來に遺傳すること明かなれば、今日の状態を見て前後の世界を推知することが出来る、恰も人類は子々孫々其形状性質を遺傳するを以て、今日の人を見て數代の人類を推知することが出来ると同じ道理であります、

既に勢力恒存、因果永續習慣反覆の道理より今日の世界は前世界の遺

傳なるを知り、今日の進化退化の順序は前世界の順序を反覆するものなるを知らば、今日の進化に照して、前世界は星雲より次第に分化して天球を開立し、其中に今日の地球の如きものも漸く成來して、其上に生物を生じ、動植人類も一度は繁殖せし事あるを推想する事が出來ます。若し其形狀大小等の細點に至ては、此世界と前世界とは同一なるを得ざるも、大球の進化分化の順序は、前世界も今日の世界も同様なるべし。道理であります、斯くして一たび進化して人類も社會も其世界に生存し、或る時代より漸く降て退化し、其極天球の大破壊を起して星雲の狀態に歸し、以て今日の世界の端緒を續くに至りたるに相違ありませぬ。左すれば太初の星雲は前世界の有らゆる原因結果を敗壞して、之を其体内に納め込である筈にて、今日今時め進化の種子は皆其中に胚胎して存せし道理なれば、星雲は實に此世界の母にして、其胎内には我々が

目前に見る所の日月星辰山川草木禽獸人類に至る迄を包藏し、余も諸君も唯物論者も俗論派も皆胎兒の狀態にて其子宮中に存せしことか分ります。是に由て之を觀れば、前世界は實に我々の父母にして、我々は其遺傳性を受けて此世界に生れたるものなることは明かであります。若し浜りて更に其父母の祖先を尋れば、無始の始無限の大化の昔に存せしこと亦疑ありませぬ。之を喻るに農夫が前年の秋獲より米穀の種子を得て、之を土藏中に納め、本年の春期に至て再び之を出して田畝に蒔付け、植付けると同じく、星雲は恰も其土藏中に納めたる時の如く、前世界の結果を集めたるものにして、其中に今日の世界の原因が潜在せるは、土藏中に米穀の種子を包藏せると同じ道理であります。唯米穀の方は自然力に人力の加はるも、世界大化の方は自然力のみにして、即ち勢力の作用と因果の規則によりて自然に定まるものなるの異同があ

ります、斯くして今日の世界の結果は再び星雲となりて、其胎内に納め
 込以て後の世界を産出すこととなる故に今日の我々は後の世界の父
 母であり、前世界は其祖父母であります、此理を推して未來無限の大化
 の反覆窮りなきを知ることが出来ます、此の如く論じ來て始て進化論
 者の假定せる遺傳の起原も、唯物論者の説明に苦みたる世界の本原も、
 唯心論者の難問たる先天性の根元も皆容易く説明し得て、恰も旭日一
 たび昇りて朝霧四散するが如く、明々白々となることが出来ます、諸君
 も定て此に至て始て此世界は無始時來の世界にして、我人は無始時來
 の人類なることが分つたであります、

第二十回 大化論

此因果論は余か建正門の骨目なれば、更に之を世界万有の上に當彼て

述べませう、進化學者が世界の變遷を見て單に進化と定めたるは、其見
 る所の狭き所以にして、又世界は死物的物質より分化せるとなすも、其
 解する所の淺き所以であります、若し余が既に依れば進化の名稱すら
 穩かならず、寧ろ開發の文字に改むるに如かずと思ふも、既に世間にて
 唱へ來れる通語なれば、其儘用ゆることに致しました、併し余は一世界
 中に進化と退化と並行はるゝことを主唱するものにして、此兩化を
 合して世界の「大化」を名くることは再三申し述べたる處なるか、其大化
 の初めと終りを「潜伏期」或は「内包期」と名け、其大化の間を「開發期」即ち外
 發期と名け、開發期中の進化の階段を「上行開發期」、退化の階段を「下行開
 發期」と名け、星雲時期を「潜伏期」と名くるは余の考案であります、今之を
 圖表に顯して示しませう、

潜伏期(星雲期)

世界大化

上行開發期(進化)

開發期

下行開發期(退化)

此潜伏期は前世界の結果を藏めて、次の世界開發の原因を胚胎せる時
 なれば、余は之を潜伏期と名けました。若し之を草木に譬ふれば、種子の
 未だ發生せざる時にして、其中には枝葉花實を含有するも、更に其相を
 示さざる時と同様であります。是より其内包の原因を開發するを開發
 期と申します。若し之を今日の唯物的進化論に對比して述べれば、左の如
 き相違があります。

破唯物的進化論は現在世界の進化を論じ、是余の大化論は前後無

限世界の進化を論ずるの別あり、

彼は世界を死物視して論じ、是は世界を活物視して論ずるの別あり、

り、

彼は物質の進化を論じ、是は勢力の進化を論ずるの別あり、

彼は外面一機種の進化を論じ、是は内實全軀の進化を論ずるの別あり、

り、

此數ヶ條は余の進化論と世間の進化論と相異なる要點であります。併し此一世界中の進化は前後無限世界の進化の標本なれば、世間の進化論に本きて前後の事を推論して差支ありません。先づ世間の進化論即ち唯物的進化論、或は物質的進化論を引延はして前後の世界に當り、之を勢力の活動の上に移して論ずれば、余の進化論となります。就ては進化に左の三段あることを知らなければなりません。

第一段 地球の進化(小進化)

第二段 天体の進化(中進化)

第三段 宇宙の進化(大進化)

此宇宙の進化は余の無限世界の進化に與へたる名目にして、世間の進化論者の未だ唱へざる所なれども、若し地球進化の理を推せば、天体の進化を知り、天体進化の理を推せば、宇宙の進化を知ることが出来ます。而して地球進化は又分れて無機進化、生物進化、人類進化等と次第するものなれば、其最も近き人類の進化を標本として、宇宙進化の理を考ふることが出来る道理であります。今生物進化論及び人類進化論にて唱ふる所の順應遺傳の兩法も余は亦左の三段に分けます。

個体の順應(小順應)
種族の順應(中順應)
順應

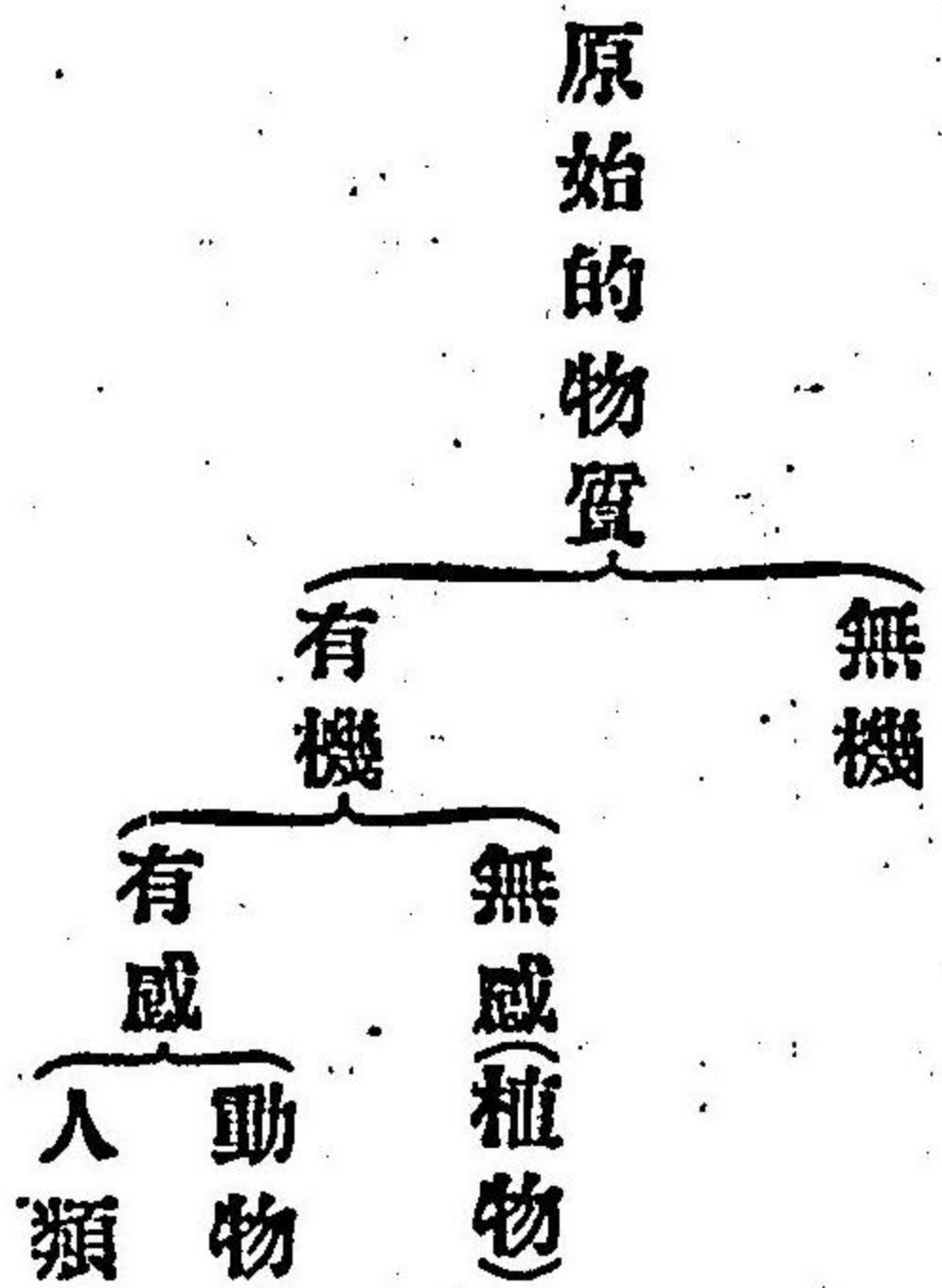
世界の順應(大順應)

遺傳
種族の遺傳(中遺傳)
世界の遺傳(大遺傳)

其所謂個体の順應とは、生物各個が其一生の間に外界の變化に順應するものと云ひ、種類の順應とは生物全体の変遷世代間の順應を云ひ、世界の順應とは前世界の開發期間の順序を云ひ、個体の遺傳とは我人各々が父母の形狀性質を遺傳するを云ひ、種族の遺傳とは生物全種或は動物人類一般に通ずる形狀性質を遺傳するを云ひ、世界の遺傳とは前世界の開發期間の狀態を遺傳するを云ふことであります。其中個体と種族の二者は世間の進化論にて唱ふるも、第三の世界的順應と遺傳とは是迄誰も唱へざる所なれども、今日の進化論の根本的原理を究明せ

んと欲せば、前世界迄沂らざるを得ざることは勿論と考へます、然るに進化論者の淺見小識なる悲さには、前世界あることを知らず、且つ其世界迄沂る丈の活眼も勇氣も有せざる爲に、進化論の本源は之を未知に托し、一切の原理を假定して論を起し、而も眞理は此外になしと鼻計り高々と緘かして居る處を、我邦の俗論派は之を見て其鼻に驚服し、遂に之を本尊として拜み上るに至れるは、氣の毒千萬に思ひます、斯くして宇宙の進化を考ふるに、唯物的進化論者は一般に最初は無機物質のみありて、是より有機を分化せりとなすも、是れ大なる誤見にして、最初の物質は表面に無機を示すも、裏面に有機を含み、内包的活物なるに相違ない、左なければ其軀分化して生物を開發するの理は決してありませぬ、依て余は最初の物質を原始的物質或は原質と名け、其中には生活も精神も含有せる活動躰、即ち内包的活物と考へます、其分化開

發の順序は左表を以て示しませう。



而して此原始的物質は星雲より來生せるものにして、星雲其物も原始的物質であります、故に其中に前世界の狀態を具備し、前世界の生物も人類も生活も精神も皆潜伏して存する本來の活物なるに相違ない、其内包せるものを外發するのが進化である、換言すれば前世界に於て取り入れたるものを此世界に於て開き出すのが進化であります、且つ先

きに述べたる習慣遺傳の事情によりて、此世界の進化は前世界の進化を反覆するものなれば、前世界に於ても原始的物質より無機有機有感無感動物人類を前の表の如くに分化開發したりしことが分ります、是より前々世界の事も後世界の事も前後無數の世界の事も皆推し測られます、底で此に一問題がありて前々世界の進化と前世界の進化と此世界の進化と其開發の順序は同一の次第を反覆する道理なるも、進化の程度に至りては前後の間に高下の別なく、一樣なるや、或は前より後の方が一層高く進み、若くは一段づゝ降下し來るやとの疑難が起て來ます、即ち其疑難は若し之を海面の波に譬れば、前世界の進化の波の高さと此世界の進化の波の高さと、其間に高低の差あるやなきやの問題と見て宜い、換言すれば前後無數の世界の大化は平行か上行か下行か、何れにあるやとの問であります、若し果して上行ならば、世界の大化は

大進化を實行しつゝあるを知るべく、下行ならば大退化を實行しつゝあるを知るべく、平行ならば進化もせず退化もせぬことが知れます、此問題に就きては余は上行説、即ち世界の大化は大進化を實行しつゝあるの説を取るのであります、是より其理由を述べませう、
今此世界の進化を觀察するに、星雲より天體を開立して、遂に我々の住息する地球の形成あるに至り、其表面に無機有機の分化を生じ、漸く進んで動物人類を開發し、更に其人類の上に社會國家を結成するに至りたる順序は全く進化にして、其進化の傾向は何れも有限を期するにあらずして、無限を期して居ることが分ります、先づ之を人類に考ふるに、我々の先天性の内刺戟は無限に向て進まんとする傾向を有し、決して有限を以て満足せざること、誰れも己れに徴して知ることが出來ます、動物及び植物に於ては我々の如き意識上の内刺戟を有せざるも、矢張

無意識的^〇自然^〇の内刺戟は無限に向て生存を永續せんとする傾向を有するは、是れ哲人の知る所であり、斯^レる手^レ近^キ標^本に就きて知る所のものを以て之を世界の^〇大化^〇の上に及^スば、是又無限に向て進化するの傾向を有するを知ることが出来ず、若し然らざれば世界其物が無限に向て大化するの理を解することが六^ツ布^シい、若し大化が果して無限に向て反^覆窮^リなしとすれば、世界全體の趨^ム勢^〇が無限的進化を目的とすることに定めなければなりませぬ、然るに我人の個體の上に考ふるも、種族の上に考ふるも、或は又世界の上に考ふるも、一時進化を繼續して後退化を始むるは如何^カ、若し本來世界全體が進化を期するものならば、何ぞ進化と退化との間に退化を見るやと疑ふものがありませうが、此點を説明するには、是非無始の始に溯^リり、世界大化の由て起る根^本的^〇勢力より論じなければなりませぬ、偕^テ世界大化の大元は無限の大

勢力が無限に向て活動を起せしに始まり、其時大勢力の活動に中心と外部との關係、或は表面と裏面との關係を生じて、中心若くは裏面は無限に向て進まんとするも、外部即ち表面は其速度中心に及ばざる爲に、同く無限に向て進みつゝあるも、自然に後に殘さるゝ氣味ありて、其結果進勢と退勢との別を生ずる様になりました、譬へば此に兩人ありて甲は速^クに走るを得、乙は速に走るを得ずと定るに、若し此兩人互に細^カを以て其跡を結び付け、同時に進行せんとするときは、甲は乙の爲に自然に後へ引^キ戻^サれんとすると同様の關係が起ります、或は又川の流^ルに譬て中央の方は速に流るゝも、兩岸に接したる方は遅く流れ、爲に後に殘さるゝ様なものと考へても宜い、即ち其中心の速度の多き方は進勢を取るも、外部の遅^キき方は退勢を取る譯なれば、其結果表面に波動的進勢を生じて、進化退化を交代して進行する様になりました、其進退兩化の

交代は之を小にしては個體の上に取り、之を大にしては世界の上に取り、以て無限の大勢力の全體に於て進勢退勢の關係を生じたる結果は、世界の進化の上に顯れ、小部分に於て進勢退勢の關係を生じたる結果は、個體の小化の上に顯れしも、畢竟二者共に同一の關係より生じたるものであります。此の如き道理より進退兩化の起りし以上は、一部分のみに着眼して視れば退化なるが如きも、全體より之を視れば進化に相違ない、即ち進勢と退勢との別は比較上の事にして、之を合すれば矢張進勢となる筈であります。然るに既に此の如く一たび世界の表面に一進一退の波動を起せば、因果及び習慣の規則によりて再三之を重ねんとし、斯くして再三反覆すれば遂に無限に向て一進一退を繼續せんとする様になります。是を以て其所謂中心の勢力は飽迄無限に向て進化せんとして内刺戟を起すも、外部の勢力は從來の習慣を繼續して之に

抗抵せんとし、大化の波動は益々大にして且つ強くなるの傾向を生ずるも、一世界毎に少分づゝ進化の高を加へつゝ進行することは疑ないと思へます。是を以て他日退化期に至るも、我々の内刺戟は依然として無限進行の方針を執るも、外部の事情即ち習慣的波動の爲に餘餘なく退化を示すに至ります。果して然らば個體の上に退化あるは更に一段の進化をなす爲の準備にして、世界の上に退化あるも亦更に一段の進化をなす爲の準備と心得て差支ありません。今之を此世界の現状の上に見れば、物質は勢力の外部即ち外面或は表面にして、波動的進勢或は比較的退勢の習慣性を繼續するものなれば、自然に無限の進化に抗抵せんとし、精神就中理想は勢力の中央即ち内面或は裏面にして、直行的進勢を取るものなれば、無限に進向せんとする刺戟を有して、物質に反對せんとし、是に於て精神と物質との競争が起る事は後に委して論ず

る積りであり、之を要するに世界の進化は無限に向て一進一退を反覆しつゝ、矢張進化即ち上行の大化を營むものと信じます、故に余輩は進化論者の一人なるも、俗論派の如く西洋の唯物的進化論の陪臣ではなく、遙に其上に超駕せる大々的進化論の主唱者なれば、諸君に於て二者を混同せざる様に願ひます、

第廿一回

意識論 一

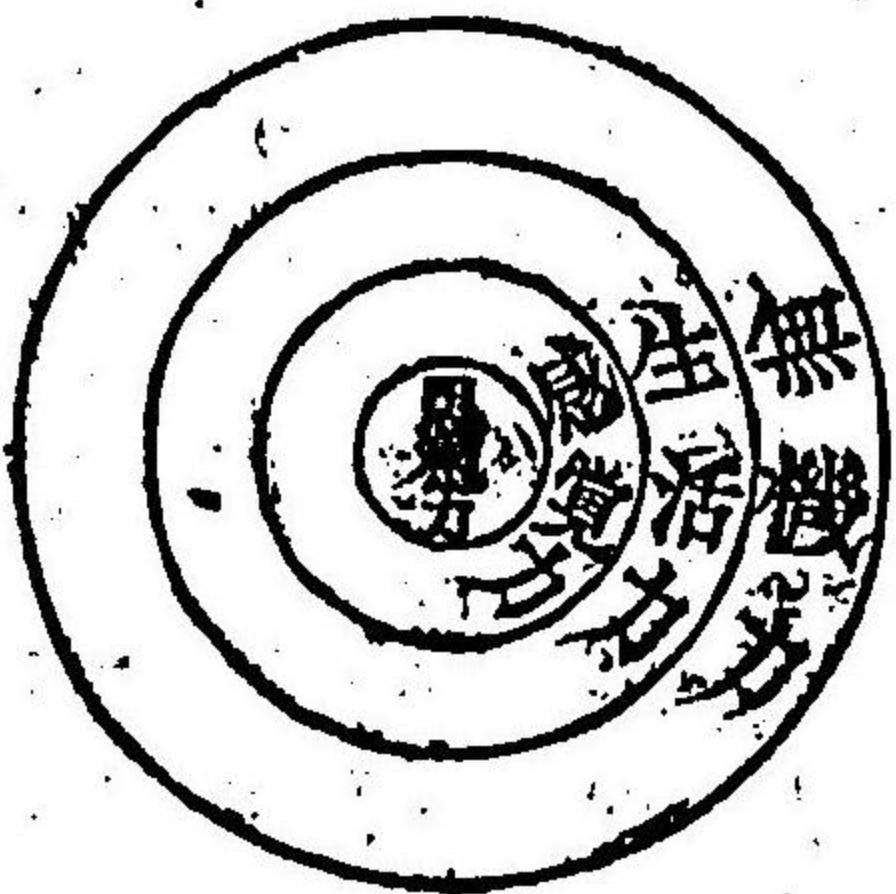
是迄述べ來りたる世界論勢力論因果論進化論は皆世界の外面より觀察したるものにして、絶待無限なる大勢力の表面即ち所謂客觀の方面に於ける所見でありますから、是より世界の内面即ち大勢力の裏面なる主觀の方面より觀察を下す積りであります、即ち是迄は客觀上我々の生存を始とし、世界万有の本籍調の一方に取掛り、其本籍は東洋の東

端に位する日本國にわらず、又朝鮮でも支那でもなく、前世界にあることを知り、次に其前世界の本籍は前々世界にあるを知り、此の如く浜りて本籍の本籍を尋れば、無始の始、世界大化の起點にありて存することが分りました、何分今日迄離れも世界の本籍調をせず、捨置た爲に無智愚昧の泥中に埋没してありしものを、余が微力を以て漸く掘り出して諸君に示した譯であります、尙ほ今一つの精神の本籍が埋れて分らぬから、是より掘出しに掛る積りなれば、諸君成るべく下手の長談義を堪て欠伸せず、聞てもらひたいものであります、先づ其話は意識論より始めせう、意識の起原は進化論に於ても一大難問なれども、余が先に述べたる如く、此世界の初に於て星雲より繼續せる原始的物質が分れて無機有機となり、其有機は更に分れて無感有感となり、其有感は又分れて動物人類となりたる點より浜りて考ふれば、意識も感覺も生活も皆

原始的物質中に潜伏して存するところが分ります、然らば其物質の中に如何なる状態を有して存するやは、此に論ずべき一大問題であります、意識潜伏の状態は恰も草木の種子の中に枝葉花實が如何なる状態を以て潜伏せるや知るべからざるが如く、到底明示することとは六ヶ布い、併し其開發の順序に就て次第を立れば、左圖の如くなる様に考へます、



即ち



即ち外面は無機物にして、内面には生活感覺思想が次第に相重りて中心を形つくるものと定め置きます、然るに余は唯力一元論を主唱する

ものなれば、無機物は勢力の外面に顯はるゝ現象にして、其勢、勢力に外まらざれば、之を無機力と名け、生活は生活力、感覺は感覺力、思想は思想力と名くる方が寧ろ適當でありませう、此思想と感覺とは意識の部類であります、又其思想の中心は理想或は理性と名くる心跡にして、是れ無限性の思想なれば、勢力の中心にありて、其跡固有の無限性を繼續するものも考へます、之に對して他の思想は有限性なれば、之を悟性と名け、感覺を覺性と名けて、更に圖表を示さば左の如くになります、



果の習慣性を有するも、又多少自己の自由力を有するを以て、其力を無意識の物質の上に加へて、之をして進化を助けしむることが出来ず、夫故に人が知能工夫を物質器械の上に加へて、或は汽車或は電線等を作り、以て社會の進化を助くる譯であります、然るに理性は無限性の根本、自由性の本源丈ありて、唯一に物質性を排去して、競争の全勝を占めんとし、悟性は物質性を利用して、進化の目的を達せんとするの相違が二者の間にあります、之を譬ふるに此に甲乙丙の三人ありて、至て狭き道を通行せんとするに、丙は盲者にして腕力に富み、乙は腕力なければも盲者にあらず、甲は明者にして腕力なくも、身輕にして頗る健足なりと定め、丙は前に歩き、乙は其次にして、甲は最後に居ると見て、互に一方を指して進行するに、丙は盲者なれば手さがしにて歩く故、休息して居ると同様の歩き方であるから、最後の甲より眺るに、實に見るに忍びず、之

を追拂ふて進まんとするも、彼れ盲人なるも腕力に富める故、動かすことが出来ず、然るに乙は一考を運らし、此腕力を利用するに如かずと思ひ、彼に説て汝は盲人なる故に進むこと出来ず、汝若し我を負はば、我は汝の向ふ所を指示して進ましめんと云ひ、其肩に乗り、兩人相合して進むに、彼もと腕力者なれば、案外早く進むことが出来ると同様に考へて宜い、即ち其甲は理性に譬へ、乙は悟性に譬へ、丙は無機性に譬へたのであります、夫故に外界の無意識的物質は成るべく我人の意識を其上に加へて、進化の助となる様に利用せなければなりません、東洋人が是まで此點に着目せざりしは、實に古今の大失策に相違ない、此點は余は俗論派と同感であります、ドウカ我邦も今後器械工藝の學を盛にして、盲目的物質を利用する工夫を運らさなければなりません、之を要するに無意識的物質が盲目的に無限の進化に抗抵せんとする

は、最初大勢力の活動するに當り、一たび退勢を取りたるが原因となりしも、其後習慣の力遂に遺傳性を成し、爲に勢力本來の自由性を失ひ、因果必然の制裁を以て無限の進化即ち直行的進化を遮塞する傾向を起すに至りました。故に其原因は寧ろ習慣性に歸して宜い、之に反して意識性の方は最初進勢を取りたる部分なれば、多少物質性に引かれて、退勢の傾向を受けしことあるも、其後退勢の習慣を反覆すること無意識性より少なきを以て、因果必然の制裁のみを受けずして、多少勢力本來の自由を有する中、理性は其最たるものであります。元來勢力、其物は自由性にして、自由に活動し、自由に進化する性力を有するも、一たび活動するや内外の間に速度の相違より進勢退勢の別を生じ、夫れが爲に外面に波動の習慣を起し、其習慣を重ねること多きものは、直行的進化を取ること能はずして、波形的進行を爲す爲に、直行的進化を爲すものに

此すれば、毎に退勢を取るととなり、其習慣が繼續する爲に、本來の自由を失ひ、因果律の制裁のみを受くるに至りました。之に反して勢力が無限の自由を以て活動するに當り、其中心若くは内面となりて進勢の一方を取りたるものは、波動の習慣に制せらるゝと少く、本來の自由を保つに至りました。斯く云ふときは必ず此に一間を發するものありて、因果律は勢力活動の規則なれば、外面となりたる方のみならず、内面の方も共に其規則の下に立つべき理なるに、意識性の方は因果必然の影響を受けずして、本來の自由を保つと云ふは解し難しと難するものがありませう。固より必然と云ふも自由と云ふも、相対比較上の沙汰にして、絶対的自由を云ふのではない。故に其所謂自由も因果律に従ふに相違なければ、勢力本來の目的は無限に向て活動せんとするにあれば、其勢を比較上其儘持ちて直行的進勢を取るものを自由を有すと云ひ、之

に反して退勢の習慣の強き方を自由なしと申す迄であります、換言すれば進行上波動の習慣性を有すること強きものを必然と云ひ、其少きものを自由と云ふ迄であります、而して其習慣性の強きものほど因果律の制裁を受くると多きものなれば、其方を因果必然と申します、若し因果律を絶対的相対的の二つに分たば、絶対的因果は即ち自由にして、無限の進化に向て直行する方に行はれ、相対的因果は波動的進行の習慣性を有する方に行はるゝの別あるのみにて、其實何れも因果律を有するに相違ない、又意識性の方も矢張波動の習慣性を有すること明かなれば、自由も必然も皆比較上の沙汰に過ぎませぬ、是等の道理は容易く了解することは難いから、諸君も味なきものゝ様に感ぜらるゝかも知れぬけれども、其實大に味ある所なれば、よく噛み碎きて見るが宜い、世間にて旨いものゝ譬に栗の如し、或は栗より旨いと申し、甘藷の一名を

十三里半と稱するは、栗より九里四里旨いを幾とするが如き、皆栗を以て旨いものゝ標準と立てます、然るに其栗は毛毬の中に包まれて、一見實に恐るべき有様であり、其中に又固き皮を被り、澁を帯びたる有様は、誰れも此中に美味の存するとは思ひも寄らざることでありませう、之と同じく余が進化論は一見更に味なきものゝ様に考ふる人あるべきも、其實一たび之を味ふるを得ば、其美味言ふべからざるものあることが分ります、諸君其心得にて熟味せられよ、

第廿二回 意識論 二

斯くして意識性の方(精神)と無意識性の方(物質)と無限の進化に對する進勢の速度を異にするも、共に無始時來出沒生滅の波動を起して、世界の進化の間に一進一退を反覆して今日に至るものなれば、此の世界は

波動の習慣性によりて出来たと申して宜い、我人の生存も我人の世界も、此身も此心も皆無始時來繼續したる習慣性の結果に相違ない、即ち我が身軀も之によりて生じ、我感覺も之によりて生じ、我見る所の事々物々皆之によりて出来たに相違ありませぬ、故に我人が一生涯に爲すこと行ふこと思ふこと亦皆波動の原因となりて、其結果は此世界或は後の世界に向て繼續するは必然であります、例へば物質上の因果は此に一個の石ありて之を池中に投ずと定むるに、池面の上に忽ち波を起し、其力は分子より分子に傳はりて、一種の運動を繼續し、其運動の範圍の擴がるに從て、我人が其助勢を見ることが能はずと雖も、水面より陸地に及ぼし、其間位置を換へ状態を變ずる迄にて、決して眞に消滅する理なく、遂に其微小なる勢力が前因後果互に相續して、世界大化の原因に加はり、其最後の結果は後の世界に至て顯はるゝ道理であります、之と

同じく我々が心の中に善にもせよ惡にもせよ一念を起せば、忽ち精神の海面に波動を起し、一方は其助勢を神經物質に與へ、是より四肢五官に及ぼし、相傳へて物質上の波動を起し、遂に世界の外面より大化の原因を助成或は妨礙するに至り、今一方は其助勢を精神中に相續し、前念後念次第に相傳へて没時に至り、或は其一部分を子孫に傳へて後世に及ぼし、或は精神其物の中に潜伏して永世に及ぼし、又は其念苟も言行に發すれば、他人の精神に振動を興へて其心中に相續し、或は内因となり或は外因となりて、死後永く滅絶することなく、遂に其最後の結果は星雲の胎内に潜伏して、後の世界を組織するの原因となるに至るは、又道理の動かすべからざるものと考へます、而して我人の心内に起りし一念が、外面に顯れて客觀上に相續し、以て後の世界に及ぼすを顯性相續と云ひ、内面に潜んで主觀上に相續するを潜性相續と云ひます、果し

て然らば我々の一念一慮一言一行一舉一動善にもあれ惡にもあれ其結果は決して空しくなるの理なく、此世界或は次の世界に於て其原因に相應せる結果を開くは疑なしと信じます、而して其因善なれば善果を開き、惡なれば惡果を開くは、固より論を待たざる次第であります、其善とはすべて我人の精神上無限の大進化を助成する方針を取るものを云ひ、惡とは之に反するものを云ふと心得て宜い、即ち其進化を助くる原因が顯性潛性共に多く集れば、其速度を早くし、或は其程度を高くし、之に反する原因が多く集れば、其度を減ずる道理にて、其最後の結果は顯性潛性共に相合して、星雲の胎内に宿りて一時潛伏するも、次の世界の進化の進行中、其開發すべき時機の至るに會すれば、忽ち發顯して今日の善惡の原因に相應する結果を開示する筈である、之を善惡因果の規則と申します、此點は俗論派などには到底分ることは六ヶ布い、何

なれば彼派の人達は次の世界あるを知らざる上に、人間の身軀が物質から出来るものと計り思ふて居ります、然るに我々の身軀は勢力の習慣性によりて出来、其習慣性は之を主觀の方より云へば、舊の世界より相續せる善惡因果の結果が顯れたのであります、若し之を前に考へて然る以上は後に考へても同じ道理にて、今日の善惡因果が相續潛伏して、次の世界に人間界を形造る原因となり、人の身軀を構成する原力となるのであります、而して今日の人間界に於て起したる行爲は、因果不斷に相續するには相違なきも、正しく其結果を開くは、後の世界の人類開發期にあると思ひます、其際には庭前の梅に就て考へても分りませう、梅其物には花の原因を備へて居ても、七月や八月には其結果を顯さず、必ず二三月頃になり前年と同時期即ち一定の開花期に達せざれば、花を開きませぬ、夫迄の間は所謂潛伏して居ると申して宜い、之れと同じく

人間の爲したる善惡の行爲は、他の原因に加はりて断えず目前の世界に其結果を顯しつゝあるも、正しく其花を開くは後の世界の開花期、即ち人類開發期にあるは疑ないと考へます、尤も善惡因果は精神上即ち主觀上に繼續するものなれば、之に客觀上の因果の相加はるは勿論の事であり、且つ俗論派は物質は我眼に見る通りの物體が常に存する機に思て居るから、余輩の申すことがよく胸に落ちぬらしい、先きに述べたる通り、物質は勢力の現象即ち勢力の外面を我感覺にて認めたる迄のものに過ぎませぬ、此物質が或は集合して形體を爲し、或は分散して形體を失ふも、皆勢力中に保つ所の因果の習慣性の然らしむる所であり、此點を篤と考へて見れば、余が述ぶる所の善惡因果の理も容易く分りませう、

是より更に進で意識性其物の由て起りし本源を論じなければなりません

せぬ、我々人類は意識の光、覺知の力を有し、動物も多少之を有するも、植物は全く之を有せず、無機物に至ては更に其影だも有せず、同じ勢力の活動より生じたるに、何故に斯る相違あるやは實に一大難問であります、此問題を解するに二機の考説あることを知らなければなりません、其一は勢力本來の性質は意識性なるも、進退兩化の波動を起したる爲に、其表面の方即ち無機物及植物の方は無意識となり、人類の方は勢力内面の真相を傳ふるを以て、勢力本來の意識性を保て居ると云ふ説であります、今一つの考説は勢力本來の性質は無意識にして、盲目的活動を有するのみ、故に我人の生存中は意識性を見るも、其前後は無意識となること云ふ説であります、而して余は此二者中甲説を取るものなるか、是れには多少の説明が入るに相違ない、余は何故に此説を取るかと云ふに、本來の勢力は純然たる無意識性ならば、進化開發して意識を生ず

る理はありませぬ、又意識は進化の初期即ち下等の階段にありて顯れ
 すして、漸く進て高等の階段に至て顯るゝとすれば、勢力の本性は意識
 性に於て、而も其大進化の目的は此内包の意識性を外發するにありと
 定めなければなりません、其他我人の先天的本心として有する理想は、
 勢力の真相を傳ふるものなるに、其跡最も明かなる意識を有する點よ
 り考ふるも、勢力の本性は意識性なること疑なしと考へます、然らば何
 故に世界の表面に無意識性を顯せしか、是又一問題であります、其理由
 は前に屢々申したる習慣性の影響にして、譬へば池の水が本來透明な
 るも一たび氷れば不透明となるが如く、本來透明なる勢力が習慣の爲
 に凝結して不透明即ち無意識となりしと見て宜い、之を要するに宇宙
 の大勢力は一たび活動を始むるや、其表面に進勢と退勢との關係上波
 動の習慣を起し、之を反覆繼續する爲に不透明の無意識性を生ずるに

至ると申すのが余の説であります、

然るに更に此に一問題ありて我々の精神は存命中に意識を有するも、
 生の前死の後に至れば無意識になるは如何、又存命中にても熟睡中若
 くは一時の變動によりて無意識を呈するは如何と、是れ尤もの問であ
 るが、余が説にては意識性を繼續すべき精神が、往々無意識を呈するは、
 矢張勢力の表面に起る所の波動的習慣の影響であると考へます、元來
 我々は或は生れ或は死することあるは、此波動の然らしむる所にして、
 其餘勢は精神は勿論、理性迄に及ばし、一時に意識の光を發するも、忽ち
 無意識の中に没する様になります、之を譬ふるに燈光は断えず其光を
 繼續せんとするも、風の爲に明滅を生ずるか如く、精神も習慣の風の爲
 に意識の斷續を起すのであります、今更に其意を敷衍して申さば、已に
 勢力の表面は物質にして、裏面は精神なるの別ありて、進化の目的は裏

面の精神を表面に開顯するにゐるも、宇宙進化の太初に表裏其動勢を異にせるより、内包の意識を外發すること能はざる事情を生じ、爲に意識は永く潜伏の状態を呈するも、表面大化の途次、物質分子の適合其宜きを得て、表裏兩面相一致するの點を示すに至れば、偶々意識の光を開顯するも、一生の前後は勿論、一生の間と雖も意識の開顯を妨ぐる事情に接すれば、明滅斷續の變化を生ずるに至ります、是れ進化の程度の尙ほ低き故であります、若し之を世界大化の上に考れば、前世界の人類開發期に生じたる意識が、其退化の際に一だひ滅して、此世界の人類開發期に至て再び生じたりとなさば、其斷滅即ち潜伏の期限頗る悠久なるが如きも、無限の大化の時日に比すれば取て驚くに及びませぬ、或は此點につき今日我人の意識中に前世界の意識期の事を記憶せざるは如何、昨日と今日との間に睡眠を起して、意識一たび休止するも、醒覺の後

は昨日の事を記憶するにはあらずやと怪むものあるべきも、是れ頗る俗難にして答ふる途でありませぬ、我々の意識は前世界どころか、五十年の一生にても前後を買きて照すことが六ヶ布い、諸君よく己れの一身に就て考へて見よ、幼時自から經驗せる事柄が長年の後に何程意識の記憶中に存し居るか、三歳四歳頃の事は如何、一歳二歳の事は如何、母の胎内に在りし頃は如何、決して分りますまい、死んや前世界の事が今日我人の上に開發せる丈の意識を以て分る筈はありませぬ、併し我々の今時の記憶は生前に及ぼす事は出来ぬけれども、我々の道理思想の力は己れの生れざる前のみならず、人類未生世界未發の前に拆りて、世界の前に世界あることを知るを得るは、前の世界の意識の繼續と見て遂支ない、何なれば是等は我人先天の知識によりて知ることなれば、其先天は父祖の遺傳なるも、若し遺傳の大本に拆らば、此世界の遺傳のみ

にては説明することが出来ず、是非前世界或は前々世界の遺傳とせなければならぬ、サツして見ると、先天的知識の大元は前世界の遺傳、即ち前世界の意識の繼續に相違ありませぬ、此の如く前世界の意識が相續して、今日の我人の精神中に其作用を現するとすれば、今日の我人の意識が後の世界に於て亦其作用を現するに相違ない、左すれば余は諸君に喜ばしき報告を致しませう、即ち我々は一たび此世を去るも、再び後の世界に生ると考へて差支ない、固より大日本帝國何縣何郡何村何誰が其儘に生する筈はあるまい、名は權兵衛が三助になり、右衛門が左衛門になるよりモット變りませうが、我々の精神が先天性となりて後世界に再生する以上は、我々は此身を以て再生するも同様の譯である、若し我々の自身の再生とは考へられぬならば、我々の子孫と考へて宜い、其上に悉く今日今時の一念一慮が因

となりて後の世界に其果を開くことが明かれば、今日の權兵衛或は權兵衛が其因縁熟して、再び生ずる機になるかも知れ難い、尤も次の世界では意識の開発が今日の世界を記憶し居ることが出来ぬにもせよ、未來無限の大化の間に幾分づゝ餘分の意識を開發するに相違なければ、意識の光力漸く其度を加へ、後には過去の世界の上を照すは勿論、前世の記憶までを保つ機になるかと考へます、其時に至らば始めて今日權兵衛三兵衛の境遇が分りませう、サツして見れば諸君決して落膽するに及ばず、失望するに及ばず、諸君の一生は決して此に盡きませぬ、是より一段つゝ勢力内包の意識を開發して、最後には無限の光明を顯すことが出来ますぞ、若し一たび臨終に至らば、大分疲れたから是より一休息するぞと思つて、生き残る知人に御免蒙りて御先に休みますと挨拶の一言を述べて、緩々眠るが宜い、其内に必ず自の醒める時が來ませう、餘り眠

りて居る間が長いと云ふは、起きて居るものゝ批評にして、眠て居る當人に取りては幾億萬劫の長きも瞬息同様であります、故に余と諸君と一たび別れても決して永訣と思ふ勿れ、無限の歲月の間には他日再び相逢て、是迄經過せし處の無限の山河や無限の風月に就て昔物語致すことがありませう、思て此に至ればナント愉快ではありませぬか、俗論派などには兎ても此愉快が分る筈はない、其見識の狭きは己れの世界の前後すらも見る力なき程なれば、宛も太陽は人家中より出で、人家中に入ると信ずる輩に勢劣たるものであります、

第廿三回

理想論

既に意識の性質起源を述べたりたれば、此に特別に其中心とも云ふべき理想即ち理性に就て論ずる積りであります、先にも辨明せしが如く、

理性は先天的無限性の我人の意識中に存するものにして、勢力本來の自由性の我人の上に開發したるものなれば、其自然の性質我人を刺戟して無限の大進化に向はしむるものであります、故にすべて我意識中の無限的思想の本跡、先天的刺戟の根源は、此理性と心得て宜い、理性の次に位する有限的思想即ち悟性は、理性の指揮に従て外界を支配するものにして、其次に位する覺性は直接に外界に接して其事情を見聞し之を悟性に傳奏するものであります、之を譬ふるに覺性は直接に人民に接する地方部の役人の如く、悟性は各省大臣の如く、理性は帝王の如くに考へても差支ありません、然るに覺性の方は物質に接する爲に、物質に固有せる波動の習慣律に制せられ、無限の大進化たる勢力活動の目的則ち世界大化の目的に直行的進勢を取ること能はざるに、理性の方は習慣律に制せらるゝこと少きを以て、直行的進勢を取りて其目的

を違せんとする爲に、内外兩性の間に衝突を起して、或は互に競争し、或は互に抗排することがあります。是を以て古來理性を本とする道徳や宗教は大に覺性を輕賤し、或は排去せんことを勉めました。然るに悟性は其兩間に跨りて雙方の事情を通じ、稍之を調停するか如き位置にあると、此悟性と理性との間にも往々衝突を起すことかあります。畢竟するに世界の開發に對して理性の方は潜伏期最も長く、開發期最も少なく、悟性は之に次ぎ、覺性は又其次にして、物質は開發期最も長く、潜伏期最も少なき程であります。而して波動の習慣性を帶ぶることは物質最も多く、覺性之に次ぎ、悟性又其次にして、理性最も少ない。故に無限の大道化に向て進行する速度、或は希望は各異なるより、其間の衝突を來す陣であります。其衝突は獨り宗教道徳と理學實驗學との間に見るのみならず、理學と哲學との間にも起りて、理學は哲學を排せんとし、哲學は

理學を排せんとするに至ります。哲學の方は理性と悟性とに關し、理學の方は悟性と覺性とに關すも、悟性の點にては調和が出来る筈なれども、理性と覺性との極端の反對者が雙方に相別れて加はる故に、往々衝突を起します。併し理學の進路を指導するものは理性の無限性刺戟にして、新發明は皆最初空想より起ると申しますが、其空想は理性より發するものであります。又我々の一身上にても覺性の方は此肉體を守らんとし、理性の方は之を捨てんとし、相争ふ結果、覺性の方敗軍して理性の勝利に歸し、遂に自ら空しく一身を殺すことがあります。斯る場合には俗論者などは之を一に厭世的觀念の結果として排斥します。けれども、決して厭世ではありませぬ。即ち理性が直行的進勢を以て早く大化を完了せんとするも、覺性が之に従はざる爲に、覺性を捨て、進まんとする結果、此に至るのであります。身を殺して仁を爲すのも、國家

社會の爲に一身を犠牲にするのも、管理性の先天的内刺戟が勝利を得
 たるに よることなれば、道徳や宗教には最も大切な特性であります、
 然るに俗論派は此特性を知らざる爲に、從來の宗教や道徳を陳腐視し
 遂に先天的内刺戟なしと断言するに至れば、何等の妄言なるか驚かさ
 るを得ませぬ、夫れでよく宗教や道徳を立てることが出来ませうか、或
 は宗教や道徳は全く無用とする積りか、此二者を缺きて、ドウして人心
 を維持するであらうか、甚た分らぬ始末であります、
 理性の起源は前の意識論中にて一通り述べたる様に、宇宙の大勢力活
 動の中心或は内面若くは裏面より相傳へて此に開發したるものなれ
 ば、其先天なるは言ふ迄もなく、勢力本來の性質即ち無限性及び自由性
 を帯びて我人の心中に存し、勢力の目的を成るべく早く完成せんとす
 る希望を有するものであります、而して此理性の内刺戟によりて、我々一

個人が己れの完全を期して、理想の希望を充さんとするのみならず、進
 んで國家社會の完成を計らんとするに至ります、覺性の方は常に外界に
 接觸するを以て差別性を取り、成るべく人々個々の差別を保たんとし、
 理性の方は勢力本來の平等性を傳ふるを以て、成るべく人々個々の差
 別を除かんとするが爲に、覺性の方より生存競争を起し、理性の方より
 社會團結を促し、斯くして競争の結果、社會の團結を見るに至り、尙ほ進
 んで國家の成立を得るに至りました、故に世間の所謂自利は覺性より生
 し、利他は理性より發したるものなるに、俗論派は利他は自利より生じ
 たりと断言するは、不都合千萬の淺見であります、是を以て國家の成立
 は理性の内刺戟の然らしむる所と心得て宜い、是れ理性か自ら抱く所
 の希望を客觀上に實行せんとして起りたるものであります、凡て博愛
 共同は管理性の刺戟より出でざるはありませぬ、斯くして理性が覺性

に勝て國家社會の團結を全くするに至れば、覺性上の差別的刺戟は形を改めて國際の間に行はれて、優勝劣敗の遺俗を演ずるも、是れ決して理性の目的にあらざり、亦勢力進化の目的にあらざること、は明かであり、ます、併し其競争の裏には理性の平等性が常に開發せんとして止まざれば、競争其物が却て協同一致の機會を興ふることとなりて、將來國際の平和が行はるゝ様になるに相違ない、其結果遂に地球上一大國を見るに至るべき道理であります、是より以上の進化は今日此地球上の政治的方面に於ては一たび止まるより外なく、其後は進化一變して退化を來すに至ると考へます、併し物質上器械上の進化は尙進行するを得べきも、是れも先きに述ぶるが如く定限ありて其極に達すれば、退化を始むるに相違ありませぬ、是より世界の退化期となり、漸々破壊を來して星雲の状態に歸するに至て止ませせう、是れ理性の無限性が敗を取

りたる計りでなく、世界全体の進化の途中退勢が進勢に勝ちたるに由ることなれども、又退化其物は第二の進化の準備なることを知らなければなりません、譬へば草木の葉が冬期に落ち去るは、翌春新芽の出づる準備と考へて宜いと同様であります、又我々が夜中眠息するのは、翌日の勞働の準備であると云ふに譬へても宜い、即ち其退化あるは、今日の世界の事情が或る程度以上の進化を許すこと能はざるを以て、更に一層高き進化を許すべき世界を組立つる爲に進化を起すと考へても差支ありません、之を要するに世界の進化は大進化の方針に向て進行するものであります、

宇宙の大勢力の表面即ち客觀的方面の標本は目前の物質界なるが如く、裏面即ち主觀的方面の標本は理性でありますから、理性其物を究めさへすれば、勢力の裏面の状態を知ることが出来る道理であります、理

性は之を覺性に比するに無限性自由性平等性を有するを以て、勢力本來の性質も亦此の如くなるべしと考へます、而して今此に時間空間と理性との關係を述ぶる必要を感じました、時間空間は覺性上に於て普遍必要の性質を有するのみならず、思想上に於て其無限と實在とを否定することが出来ぬ以上は、理性の先天性と考へなければなりません、然るに覺性上に於ても遍在恒有なる以上は、客觀的實在否形式として其存することを許さなければなりません、換言すれば主觀客觀兩面に普遍せる形式であります、是に由て之を觀るに、勢力其者に固有せる形式なるに相違ない、即ち時間空間は主觀上勢力固有の形式なる點より、理性の先天的思想となり、客觀上勢力活動の形式なる點より、覺性の先天的直覺となりたるものと考へます、換言すれば勢力に附隨せる形式にして、恰も物に影の相離れざるが如きものであります、

今一ツ理性に就て述べた點は、眞善美三性と理性との關係であります、此三者は皆其本源を理性中に發するより之を觀るに、理性の特性と考へます、而して理性は宇宙大勢力の内面的標本とすれば、此三性は大勢力の特性なることが分ると同時に、又無限の進化の目的は此三性を充實完了することが分ります、其際には現今の進化に於て理性が此三性を充實することのみを目的として居る所から想定する次第であります、而して其美は理性が万有界に對して求むる所の希望、其善は人間界に對して求むる所の希望、其眞は絶對界に對して求むる所の希望にして、其第一は美學に關し、第二は倫理學に關し、第三は純正哲學若くは知識學に關する特性であります、故に之を其希望の相手の方に當嵌て云へば、第一は自然界の目的、第二は意識界の目的、第三は理性界の目的となり、此點より考察を下せば、大進化の終局は自然界の美を圓滿な

らしめ、人間界即ち意識界の善を圓滿ならしめ、絶對界即ち理性界の眞を圓滿ならしめ、此三圓の相合して一となる所に存する機に思はれま
す、而して万有界就中物質界上に美を現する理由は、物質其者が習慣性
の爲に凝結して不透明の状態を現はすに至るも、其裏面には勢力本來
の透明性即ち光明性が存するを以て、其餘光を往々不透明の物質上に
漏す場合に、我人の理性より之を認て、美を感じることに考へます、若し
物質其物の自然の構造或は組織或は配合か其裏面の光氣を漏すに適
せざるときは、人間の意識力即ち人力を其上加へ、排置適合の宜きを
得るに至れば、矢張裏面の光明を漏して美を呈する機になる、即ち美術
の事であり、是れは我理性が其光氣を認むるより生ずと考へます、
故に我々は進化を大成する目的を以て物質界に對しては、人工を興へ
て本來の美を示さしめんことを勉め、人間界に對しては、教育を加へて

善を進めしめんことを勉め、絶對界に對しては眞理を窮めて眞を完う
せんことを勉めなければなりませぬ、是れ皆我々本來の目的なれば、我
生命の有らん限り、事々物々内外百般の進化に力を盡して、人類社會國
家の完成を期することを要します、而して其結果は決して空からず、此
世界のみならず、未來の世界迄繼續して、一步進めば一步の功を顯はし、
一善積めば一善の果を開くに相違ない事は、誰れが保證するか、即ち我
理性が保證する所であります、余輩は此保證を固く信じて、先天性内刺
戟に従ひ、五十年乃至百年の一生の間に國家社會の上に何程の事業を
成し、以て進化の大勢を助け得るかを己れの一身に試んことを天下公
衆に向て誓ひます、

第廿四回

無限論

以上述べ來りし部分は我人の所謂可知的門なれば、之に對して不可知的門があります。從來は可知的門不可知的門の分類を用ひしも或る意味に於ては不可知的門即ち可知的門となり、我思想の上に一方は知るべしと知り、他方は知るべからずと知るものなれば、二者共に思想の範圍内に歸します。此知るべからずと知ることば人の解し難き所なれども、世の中に多く之に類したる例があります。例へば世間にて信じられぬものと信ずるとか、明らめられぬものと明らめると申すことば、皆同じ例であります。或る學校にて同窓の者の一編ある點を取りて異名を付けること流行し、何事にも決して本人の姓名を呼はずして、異名計を呼ぶことに定めたるが、會中の一人可なり金持のものありて、自分丈異名を付られぬ様にと願ひ、會生一同を招き、響應して其事を願みたれば、一同快く承諾して、當人丈には異名を與へぬことに致しました。斯く

して其後會中にて當人を呼ぶに「異名なしサン」と申したる由なるが、已に「異名なし」と呼べば是れ異名ある譯にて、眞の異名なしではありませぬ。之と同じ道理にて、已に不可知的と云へば是れ不可知的なりと知りたるものにして、全くの不可知的とは申されませぬ。夫故に余は可知的門不可知的門の代りに有限門無限門の名稱を用ふる積りであります。而して是迄數回を重ねて述べ來りし分は有限門にして、唯此に無限門の一が残りました。之を無限論と題して話させう。

有限門も無限門も共に我々の思想なるに相違なきも、有限門の方は思想の積極面にして、無限門の方は思想の消極面であります。故に無限門は思想にて其無限たるを認むるのみにて、無限其物は握ることも擧ぐることも握むることも出來ず、之に近寄らんとすれば、忽ち後の方へ跳ね返されて、恰も己れの手を以て己れの跡を擧げんとする様なもので、奈

何ともすることが出来ませぬ、底で考ふるに無限其物は思想の四極にして、二者の限界同一なるに相違ない、故に無限は猶ほ思想の中にあると云ふも、思想の外郭であります、依て哲學上の研究は何事も無限の點まで推し窮れば、其役目は終ると考へて宜い、若し無限の點まで究め盡さずして、途中にて止まるならば、是れは所謂假定若くは獨斷と申すものであります、然るに唯物論者は有限を起點として、四隅皆有限に終るものなれば、之を評して假定の甚しきもの、或は哲學の本分を盡さざるものと云はなければなりません、斯くして已に哲學が思想の有限門即ち積極門に始まりて、無限門即ち消極門に終ることを知らば、余が今迄論したる所は思想の終極迄達して、哲學の本分を究めたるものにして、是より以上は宗教の領分に屬します、哲學の方は悟性と理性とによりて研究し、有限門は悟性の受持、無限門は理性の受持、即ち有限門より無限

門に及ぼし、或は無限門より有限門に及ぼすは、理性の受持であります、が、宗教の方は道理思想を超越したるものなれば、悟性の受持であります、併し宗教は外面は哲學に關係して存するものなれば、理性も其一部分に加はりて、悟性理性二者の受持と見るが宜い、故に余は思想の方面より觀るときは、宗教は哲學の應用であると考え、而して其二者の關係は哲學にて有限門を積極とし無限門を消極とする處を、宗教にては無限門を積極とし有限門を消極として説くから、哲學窮りて宗教を生ずる道理であります、が、余が今回の講述は哲學次に限る積りなれば、宗教の事は申しませぬ、

併て此に世界の無限を考ふるに、空間及び時間の無限なるは説明を待たず、其二者の間に亘れる世界は、一進一退一開一合、星雲に始まりて星雲に終り、再び星雲より世界を開き出す、其狀恰も瓢箪の如く、星雲は實に

其中間の溢れ目にして、其前後に世界が開き出して居ることなれば、之を世間より異名して孤單説と呼ぶも構ひませぬ、其孤單は一つや二つではなくして、無数の孤單が壁に連りて居る様な工合に、星雲の前に無数の世界ありて、同く一開一合一進一退を繰返して止まざるは、無始の始めより無終の終に至るものであります、故に世界の大化は時間の無限なるが如く、過去未來共に無限にして、我思想の力にて其起源も其終極も知ることが出来ず、此に至れば哲學の領分の限りと思て説明を止むるより外に致し方はありませぬ、併し又我思想の力縱令其初は無限にもせよ、大化の起點があるに相違ないことを期するを以て、無限の中より宇宙の大勢力が活動を始めて漸く進行する間に、進勢退勢との別を生し、表面に波動を起したるものが目前の物質界、即ち勢力の表面となるに至り、其裏面に相續するものは意識、就中理想して、之を表面に向

て開發せるは我々人類なりと云ふのが、余が唱ふる所の説であります、之に對しては必ず一問の起るありて、其勢力が何故に活動を始めしやと云はんに、勢力はもと活動を性とするものなるに由ると答ふるを以て足れりと考へます、何なれば其以上に派れは無限の海中に入りて、思想が進むこと能はず、強て進まんとすれば後へ跳返さるゝ計りであります、又世界大化の將來を考ふるに、是れ又一開一合一進一退を繼續して、無限無終の時に及ぼすと云ふより外なく、是より以上は無限中に入りて跳返さるゝ様になります、唯其終極は今日の世界より之を推すに理想本來の特性たる眞善美三性を外面に開發して、理想の目的を完了するに至らんことを想定するのみであります、底で余は此兩端を以て思想の兩極となし、世界の大化は無限より始りて無限に終ると定め、哲學の本領は此に至て窮り、其より以上は宗教の信性に訴ふるより外な

しと考へます。

古來の唯物論は此大勢力活動の表面を見て裏面あるを知らず、唯心論は其裏面を見て表面あるを知らずして互に相争ひたるも、各一方の偏見に過ぎませぬ、而して余が説は此兩面を存する中庸説なれば、唯物にもあらず、唯心にもあらずるべきも、二者相對するときは唯心論を取るものであります、何なれば余が所謂勢力は本來延長を有せず、且つ意識性のものであり、唯物論の所謂物質とは異なるものなれば、唯心論の原理に近きものであり、且つ其道理は唯心論によらざれば解し難い、夫故に余は之を新唯心論と名けます、併し若し其意識は勢力中に内包せるものと立つる以上は、之に與ふるに唯心論の名を以てするも穩かならずと評するものあらば、先きに示すが如く之を勢力大化論、或は唯力一元論と名けましたが、唯心論より一步進みたる理想論と稱同じと見て

宜い、唯從來の理想論は唯心論に傾き過ぎる風あれば、余は勢力を中心として論じたる丈が理想論と異なります、併し理想論の考を基礎として組立たるものなれば、理想開發論と名けても差支ない、而して心身物體の問題に至ては、勢力の表面の物象を見て、物體を想し、勢力の裏面の心象を見て、心身を想したるものなれば、二者の體共に是れ勢力にして、一元なりとの説であります、所謂一體兩面不一不二の説と心得て宜い、更に我人の理性と絶對唯一の勢力との關係を考ふれば、是れ又一不二であり、また、理性の外より之を觀れば、我人の理性は宇宙の勢力の一部分なるに相違なきも、理性其物の方より之を觀れば、我思想を離れて勢力を認むべからずして、勢力其物は全く理性の光の中に包摂せられて存するものなれば、理想と勢力とは不離不即、即ち不一不二なりと考へます、即ち理想は我心中に其端を開くも、其根據は勢力の裏面全體に

互りて存するものにして、其縮寫鏡を我心中に具へて居る様なもので、此鏡より客觀界を窺へば、亦勢力の表面全體を見ることが出來ます、俗論派は必ず之を名けて心中の魔鏡と申すかも知れませぬが、魔鏡でも幻鏡でも化物鏡でも構ふには及はず、我人が無限無邊無量等の状態を窺ふは此鏡の外にありませぬ、是に於て我々は勢力の無限廣大なるにも拘らず、我心中の理想を以て其實在及び活動を知了するに至る際であります、此理を推して考ふれば、有限も無限も亦不二なることか分ります、若し此無限門を開きて之に直達する法を示すは宗教にして、其妙味實に計るべからざるものあるも、余は他日別に講述致す積りでありませぬ。

第廿五回

應用論

借て借て下手の長談義を一回一回又一回數十回を重ねて述べましたが、定て諸君も退屈を感じられたでありませう、サウ云ふ拙者も大分憂きが來て、諸君と欠伸の競争をしたい様になりましたから、此一回にて長談義を止める考へであります、畢竟かゝる長々しき話をするのは、決して物數奇で申すのではなく、近來大先輩中先輩小先輩の諸氏が神佛三道は陳腐なりとして、一から十迄西洋實驗説を擔ぎ出し、我東洋の特性も長所も取り除き、剩へ人倫道德の基本迄取り除かんとする時節に成り、寐ても起ても居られない一大事と心得、大に呼で天下の同志を集め、會聲の耻雪ぎをやりたいと思て、第一に俗論派の執る所の唯物論を破壊し、次に余輩の守る所の理想論を主唱して此に至りました、唯物論にては物質の實態、勢力の本質、進化の原因等一として假定に出でざるなく、若し其何たるを問はば、是れは不可知的なりと斷り、毫も其根抵

を究めざれば、途中にアラ／＼懸りて居る様な有様なれば、余は之を浮島説と名けました、其説によれば、人には先天性や無限性などのある筈なく、先天は父祖の遺傳と云て、其遺傳の本源を示さず、又無限の思想は有限の抽象と云ふのみにて、有限を引延ばして無限に至らしむる原力如何を示さず、然のみならず自ら物質の外に精神なく意識なく理想なきを唱へながら、其判断は全く意識や思想によりて下せるを知らざる有様であります、斯る途中にアラ／＼然として居る浮島説を我邦の俗論派は何たる珍客と思ひしやら、優待歡迎せらざるなく、己れ獨りのみならず、日本國中同胞兄弟をして悉く之を崇拜せしめんとする勢なるには、實に憤然に堪へませぬ、而して其言には西洋の唯物論及び進化論などは實驗上の事實によりて構成したる論なれば、東洋流の空想とは天地の相違である、すべて真理の標準は外界の事實の上に立つるより

外なく、己れの思想中に存することが外界の事實に照して内外一致するときに之を眞とし、一致せざるときに之を非とする迄である、然るに唯物論などは皆事實に照して立てたるものなれば、是位に確真なるものはないと云ひ觸しまするが、是れ大なる了簡違と申さなければなりません、第一に唯物論は實驗によると云ふも、理學の如くに實驗の範圍内文に就て申すなら恕すべきも、理學の實驗説を無暗に實驗以外に持ち廻りて、確實々々と言ひ觸すは、實に無理なる押付賣り同様であり、日本の通用貨幣を以て世界中に當儀め様とするも同じ事であり、且つ唯物論は思想中にある事柄を外界の事實に照して一致するものを取るから眞理であると云ふは、余輩には更に解することが出来ませぬ、思想中にある事柄は唯物論者の説によれば、すべて外界の経験より得たるものではありませぬか、換言すれば外界の事物の影像が心中に

留りて思想を組立ると申すではないか、左すれば心中の思想は外界の事物の複寫であるのに、此複寫が如何に外界の事實に一致符合したりと云て、毫も眞理の保證にはなりません、例へば此に甲の畫幅と乙の畫幅ありて、乙は甲の複寫なるに、乙の幅が何程甲の幅に符合する所あるも、毫も眞偽の鑑定の證據にはならず、例へば同様にあります、畢竟此の如きは豫め外界の事物を眞理と假定せるより起りたる迄にて、其前に何故に外界の事物が確實なるかを究めなければなりません、然るに其證明なき限りは假定獨斷の說たるを免れぬは無論であります、其他唯物論にて説明の出來ぬ點は何程あるや知れませぬ、時間でも空間でも因果律でも決して唯物論の力にて分る筈はない、就中天運の一條に至ては、是迄唯心論者も説明に苦で居つた位であるから、唯物論の手際で知れる道理はありませぬ、余は此事に付色々工夫し、遂に前世界の因果の引

續きなることを發見しました、例へば人が毫も豫想豫期せざる災難不幸或は幸福に際會するが如きは、是迄は大抵不問に付し、偶然の出來事と見做し置きたるも、學術上偶然の有るべき理なく、必ず然るべき道理ある筈であるのに、誰れも説明を與へませぬ、然るに余は今日の世界は前世界の引續にして、此世界開發の順序次第は前世界に於る種々無量の原因事情の相合したる結果なることを發見し、始て天運の起る原因を明かにすることを得ました、是れは他日別に論ずる者ありて、今回は見合せる事に致しました、

此の如く唯物論は理論上不都合の點至て多い處、應用上一層甚しく、其結果東洋の特性を破壊するのみならず、國家の道徳を破壊するの恐れがあります、先きに申したる通り、西洋の長所は有形上の實驗學にして、是には余輩も實に感服して居るけれども、其實験の器械を直ちに無形上

の道徳宗教に當嵌むるに至ては、恰も活きたる人間を棺桶の中に入れ
 る様なもので、世の中に此位不都合の事はありません、是れは全く西
 洋の失策なること明瞭なるに、我邦の俗論派は有形の實驗學に目も心
 も共に奪れたる爲に、氣車電信の應用と同様に我社會に利益を興ふる
 ならんと考へたるは大見込違であり、故に道徳宗教は日本固有の
 ものに今日に相應する丈の改良を加へ、若し垢が付て居るなら、西洋の
 石鹼を假て洗濯するは差支ないから、西洋學の長所を取りて其説を改
 良、若くは進長する要具丈に用ゆる様に致したいものであります、故に
 余が建正門として述べたるものは、西洋の學論を要具として東洋學、就
 中神儒佛三道の先天的學理を證明し、併せて我邦固有の人倫道徳を動
 さざる様に其基礎を鞏固にする爲であります、是より前述の理論を神
 儒佛三道に配合して話させよう、

先きに余の所謂星雲は儒教の大極に當り、道教の大虚若くは無名に當
 り、佛教の空若くは心識に當り、本邦にては日本書紀の混沌、又は如鷄子
 に當り、古事記の高天原に當ります、而して佛教の眞如は余が所謂宇宙
 の大勢力の跡を云ひ、日本書紀の神聖生、其中とある、其神聖は星雲中に
 胚胎せる靈氣、即ち内包の意識、理想を云ふと見て宜い、又儒教の大極は
 星雲と見ずして、宇宙の大勢力と見ても差支ない、此勢力の表面は水の
 凍りて不透明になりたるが如く、其裏面は水の透明なるが如く、其透明
 なる部分は精神となり、理想となりたるものなれば、之を氣の純と不純
 とに配しても宜く、又易の陰陽に配しても宜い、儒書に陽の精氣を神と
 なすとありて、其透明なる裏面は此陽の精氣に當ります、又孟子の所謂
 浩然の氣も我邦の大和魂も、其裏面の精氣と見て宜い、而して佛教の起
 信論にて覺と不覺との二種を分つは、精神中に覺性と理性とを分つに

同く、又涅槃經の悉有佛性の佛性も、儒書の良知良能も、皆余が所謂理性に當りますから、之を一々神儒佛三道に當嵌めて説かば、立派に先天的學説を立つることが出來ます、其配合に付ては余先年忠孝活論と題して論じたるものがありますから、諸君が其書に就て講究あらば、必ず明瞭に分りませう、

此先天的學説即ち理想的學説は我邦特殊の國體を立つるに最も肝要であります、若し先天説を排して、西洋の唯物論や自利敎を持ち來りても、決して立つ道理はありません、何程俗論派が團子を挽る様に挽廻はしても、唯物論の中から先天的忠孝や國體が出る筈はない、若し出るならば石や瓦の中から黄金も出る筈であります、諸君は定て我邦の忠孝は先天的にして、國體も亦先天的なるとを知りませう、之を若し唯物流に解釋したなら、先天的は便宜的或は自利的に一變し、自利的忠孝、自利

的國體となるに相違ない、若し夫れでも宜い覺悟なら、イザ知らず苟も萬古不變の先天的國體を天壤と共に萬世無窮に傳ふる意ならば、自利的學説を放逐して、獨り先天的學説を講究せなければなりません、畢竟するに近時流行の唯物論は神州の清潔を汚すものと斷言して宜い、唯我々が日本國民として盡すべきは先天的理想の内刺戟に應じて、進で先天的國體の理想を圓滿完美ならしむるのみと考へます、是迄の神儒佛三道の缺點は西洋實驗學の要具を借りず、從來の有の儘に傳へ來りし事と、此三道の弊は國際の競争に對して進取の方針を取らざりしとの二點にあれば、是れ全く時勢が未だ其必要を促す迄に急迫せざるに由るものなれば、今より其方針を一變して、敢爲進取の主義を執らしむれば、其結果は唯物論より遙かに優るべきは必然であります、何なれば元來三道とも先天の學説なれば、心天辰も高き處より發

する先天の命令に従ひ、有らゆる自利の私情を排し、單に一死以て國家を守るの精神を起さしむることが出来ず、是等の道理は余が精神を込めて忠孝活論の中に論じ置きたれば、諸君の一讀を煩すを得ば幸甚であります。

第廿六回

結論

先づ俗論退治の講義は此に終を告ぐるに至りたれども、其問題たるや頗る大にして、到底二三十回の講義のよく盡くす所ではありませぬ併し余の今回の講義は最初に述べ置たる通り、近來唯物論の腥き風が我邦の先輩の間に行はれ、漸く後進を風靡して、神州の光景之が爲に一變し去ちんとし、神儒佛三道も風前の燈の如き勢に立ち至りしを見て、憤然の餘り自ら進で正論派の先鋒となり、此に俗論派に對して戦端を開

くに至りし迄なれば、他日更に一大論を起草して大に戦ふ決心であります。是迄講述したりし順序は、最初に破俗門を設けて、俗論派の執る所の唯物論進化論等を實際上并に理論上より攻撃して、次に建正門に移り、余が講究中の學說を述べて、東洋諸學就中神儒佛三道の先天說の根源を論定り了りました。而して今之を一結するに當り、余が今日の時弊に對する所感の一端を述べ併せて、余の國家會社に對する決心を天下公衆に告げ様と考へます。最初にも一言したる通り、近年教育の普及と學術の進歩に従て、人の死を恐るゝこと一層甚くなりたる様に感ぜられますが、死は固より恐るゝが人情の常なれども、唯無暗矢麩に死を恐るゝほど恐るゝことはありませぬ。余は人間が死すべき時に死するほど愉快はあるまいと考へます。唯グズグズして長生するのが人間の望む所ではありません。苟も社會の爲國家の爲盡すべきを盡くし、爲

すべきを爲して死する以上は自ら快哉と呼んで永訣を告げて宜い人の
 辭世の歌や詩を見るに泣言計り並べ立てゝあるが此位降らないこと
 はありませぬ若しソソナに泣き言を云ふ様ならナゼ平生に其準備を
 して置かぬのか死場に臨んで棺桶に足を掛けながら泣いた悔だとも何
 んの益に立つものか人間は死ぬものであると云ふことが死ぬとき始
 て分つたのか生あるものは必ず死に歸すとは世界開闢の昔から分り
 きつたことで百も二百も承知である筈だ夫れを死ぬるときになりて
 始めて分つた様に迷ひ出すとは實に呆れ果てた次第であります苟も大
 丈夫となりて生れて來たものは病何ぞ憂ふるに足らん死何ぞ恐るゝ
 に足らんの大決心を平生に持ち愈々國家の一大事とあらは兼て覺悟
 の事として喜び勇で一命を差出す心得で居らなければなりませぬ若
 し病で家で死するも戰て野で死するも死は一ツならば一人の爲より

一家の爲一家の爲より一郷の爲一郷の爲より一國の爲に死するは實
 に榮譽の死と申して宜い然るを譯分らずに朝夕死なぬ様に祈りて計
 り居るのは毎日太陽の没せざらんことを祈ると同様愚かの最上であ
 ります其他私か死んだときは成るべく葬式を賑かにせよ墓場を立派
 にせよ會葬者の一人も餘計にある様にせよなどの注文は實に驚き入
 つたる次第ではありませぬか是等は皆死んだ時に白粉付て化粧させ
 よと云ふ注文と同様であります墓場などは何年何月何日何某死と云
 ふ木標一本にて足ることと思ひます若し社會の人が其遺徳を慕ふて
 墓場を立てるならよし自分から持出して立派にするは決して感服す
 ることは出来ませぬ若し其位に立派にしたいなら存命中に社會國家
 の爲に裨益になることを働きて置くが宜いサウサイすれば社會の人
 が其儘にして置く筈はありませぬ社會は我々の埋葬場でありて生時

に成したる事業が死後迄其埋葬場に残るのが即ち眞の石碑と申すものである、サウ云ふ石碑を立つる様に平素心掛くるが宜い、此等の點に
 なるど中々人に優れた利巧の人が案外愚かに見えます、之を何んと言
 けてよからうか、余は恐死病と名けました、斯く恐死病の流行するのは、
 一は西洋より唯物論進化論等の學説が舞込だ結果ではないかと考へ
 ます、よしサウでないにしても、此等の學説は其病毒を蔓延せしむる媒
 介となることは疑ありません、恐死病者に此説を勸むるは、腐室扶斯思
 者に狼りに食物を勸むるが如く、本人は渴望して居る所なれば喜で之
 を用ゐるに相違なきも、其人の命より大切なる道徳を死滅に歸せしむ
 るは必然であります、此病人に決死の精神を起さしむる良薬は、先天的
 學説を教へ込み、一死以て君恩に報るの精神を養成するより外にあり
 ませぬ、今國際の競争漸く急を告げ、東洋の天地將に多事ならんとする

に當ては、國民舉て一死以て國家を護するの精神を起し、決死的團結を
 作りて置かなければならぬ、時節となりました、併し死ぬ計りが人間の
 功らではありませぬ、我々生れながら有する先天性の命令を以て、目前
 の万物を我配下に立たしむる希望を有することが必要であります、換
 言すれば人盛んなれば天に勝つ、の勇力を起して、自然を利用し、器械を
 製作し、殖産を興し、工業を盛んにし、一敗二敗乃至百敗を重ねるも、耐忍
 不拔百難を排して進むの決心を抱かなければなりません、何でも此世
 界は我々の仕事場か勉強室と心得、天に掛り居る太陽は開闢以來吊し
 たる大ランプと思ひ、月は提灯と思ふて居るが宜い、斯くして内に一身
 の道徳を圓滿ならしめ、外に國家の理想を充實せしむるを期すること
 人間の世に生れたる目的でありませう、其事は我々の先天的理想が我
 に教へ且つ保障する所であります、若し之に反し、遊惰放蕩に日を送り、

自利の私情を恣にし、一毛一點の社會國家を利することなきの徒に至
 ては、覺性の奴隸となりて理性の命令に背くものなれば、其死を恐るゝ
 こと牛馬よりも甚しく、見るに忍びざる悲境に呻吟するに至ります蓋
 し哲學上に覺性は人間一代限りにて死滅し、理性は不死不滅なれば、覺
 性に従ふものは死を恐れ、理性に従ふものは死を恐れずと申す既ある
 が、是れ一理ある言と考へます生涯唯己れの肉體の奉公計りして遊惰
 放蕩に日を送くるは、肉體の爲に此上なき忠義なれども、其主人公たる
 肉體は三十年か五十年の間に或は烟となりて散じ、或は土となりて朽
 ちるから、死を恐るゝこと牛馬よりも甚しくなる譯であります、若し社
 會國家を己れの主人公として之に忠義を盡くし置けば、己れの肉體は
 朽ちて土とならうとも、己れの主人公は永く生き残つて居るから、安心
 して死ぬことが出来る道理であります、死んや己れの社會に對して盡

くしたる事業は、大小に拘らず、永く人の目にも人の記憶にも残るから、
 一層安心して永眠に就くことか出来ます併し、若し死を恐れて死が免
 れらるゝものなら、恐るゝもよけれども、時至れば草は枯れ、木は朽ち、人
 は死する常則なれば、恐れて心配する丈が損であります、然のみならず
 恐るれば、恐るゝ程死期を早めるものでありますから、死を恐るゝは死
 を祈ると同様なれば、此位馬鹿らしき事はありませぬ、夫故に、恐死病を
 直す一つの方法は、肉體に忠義を盡くことを止めて、國家社會に忠義を
 盡す様にするが宜い、兎に角人間は一たび生れたる以上は、其日より早
 晩一度は死するものと覺悟を極めて如何なる災難不幸病氣にかゝる
 も、毫も其心を動かさぬ様にして居らなければ、犬や猫に對して人間の
 顔が立ちませぬ、ナント耻かしいことではありますまいか、故に死期に
 臨まば、日暮れて眠に就く心地にて、家内眷屬朋友に今より一眠するぞ

その一言を述べれば是れにて足ること、考へます而して身命の有らんと
 限りは己れの一身を一家に比し精神は主人の位置にありて手足五官
 は其命を奉ずる奴婢と心得、其中には權助もあり於三ツンもあり、門番
 もあり取次もありませうが例へば手足は權助や於三ツンの如く、五官
 は門番や取次の如きものであります、此手足の奴婢は別に月給を渡さ
 ぬ代りに主人が食物を取りて無料で養ふて置く様なもので、若し手足
 が病氣を起せば主人は診察代藥料迄仕拂て居ると考へて宜い、其位に
 手當をして抱えて置く奴婢に、毎日何にも仕事を命ぜずに遊ばして置
 くことが出来やうか、何れの家にも奴婢をかゝへて置く以上は權助
 には庭掃除を命じ、於三ツンには飯炊を命ずるが如く、手足あらば毎日
 之を使ひ廻して遊ばせかぬ様にするが、主人たる精神の役目でありま
 す、五官も其通りに相當の仕事を受けて空く遊ばせぬ様に監督せなけ

れはなりませぬ、然るに若し有益の事にあらずして無益の事に手足五
 官を使用するは、一家の主人が奴婢を相手として毎日博奕や加留太に
 耽ると同様にて、此位の不都合はありますまい、故に人たる者は、手足五
 官を使用して、外界万有を己れが配下に立たしめ、天地を號令し、日月を
 指揮して、其得る所の福德は之を社會國家に與へ、己れと國家と共に圓
 満完全の妙境に到らんことを期する様でなくては、人間に生れて來り
 たる本分が立たぬこと、考へます、

以上は世間普通の説明を述べたる迄なれば、是より其説明を余が一家
 の學說に考へて話して見ませう、諸君は定めて我々の身も心も前世
 より因果相續して此に其形を結び、其生を示す様になりたることも、又
 物質の方は勢力の活動によりて起せる波動の習慣性強く、精神の方は
 比較上其習慣性少なき爲に、理性の方は先天的自由を有すれども、物質

より映射し來れる覺性の方は、其自由の進勢を妨げんとする傾きありて、其結果我々の一生は覺性と理性との競争を以て充たすことは、承知せられたであらうと思ひます、斯くして理性と覺性の競争の結果、覺性の方が勝を占れば、人間は墮落して禽獸に陥り、理性の方が勝を得れば、人間の面目が始めて立つ譯でありますか、世間の恐死病などは、覺性が一身を支配して、理性を心室の片隅へ押込てしまふから起ります、斯る場合には、理性の方に力を添へて、飽迄覺性退治を實行せなければなりません、然るに唯物論の主義は全く其反對に出で、覺性を鼓舞して、理性を抑壓せんとするにあれば、道德の本心を抹殺し、愛國の元氣を窒息するの不幸を見るは必然と考へます、元來唯物論は學術上の實驗より起りたるものにして、其方面にありて、覺性を鼓舞する必要あれども、之を直接に道德の方面に適用するは大なる見込違と申さなければなり

ませぬ、故に余が意見は今日の時弊に對する計りでなく、道德宗教の方面にありて、苟も人心を維持せんと欲するものは、先天の學說を講じて、理性の内刺戟を進長するの方針を取り、勢力本來の無限的進化を助け、覺性も物質も皆其號令の下に立たしめ、理性其物が懷抱せる進化の設計を我一身の上には無論の事、更に進て國家の上に建設せしめ、我々の一生一代の間に何れの點迄成功し得るやを試みんことを切望するものであります、斯くして一たひ建設したるものは、幾方劫を繼とも滅することなく、世界の趨勢と因果の理法とか、保障人となりて、我死後幾万劫の終りには此世界一たひ滅絶するも、其種子は星界の土藏の中へ收まりて、次の世界に再び開發する道理なれば、我々が今日國家の爲社會の爲に盡したる一善一行が、此世界の人類滅絶迄相續するのみならず、世界破壞後も時間の有らん限り、無終の終迄永續すること明かであり

ます、左すれば苟くも己れが存命中に社會國家の爲に寸善尺徳を施したる肥臆あらば、満足安心して永眠に就くことが出来ませう、唯憂ふる所は外界の事情が理性の思ふ通りに左右することの出来ない場合に、理性が外界を離れ孤立して目的地に到らんことを希念するに至り爲に厭世を引き起す一事であります、今日迄東洋の學風宗教が此方針に傾きたる弊あることは、余輩も承知して居ます、故に今より後は此弊を矯正して、飽迄理性を鼓舞し、以て其進路に當れる百難を破り、千苦を侵し、其目的を外界に向て貫徹せしめ、所謂天地を號令し、日月を指揮して、理性自ら懷抱せる圓滿なる國家を建設し、後世子孫をして之を繼續せしむることを所り、其上に余輩は日本人なれば、今日の同胞と共に日本帝國をして此地位に至らしめんと願はなければなりません、而して神儒佛三道も亦其固有の先天的學說を此方針に向て當倅め、専ら厭

世を避けて愛國を先きとせられんこと、是れ又余輩の熱望する所であり、ます、今や東洋の獨立國は漸く猛獸の餌食となりて、將に其胃袋中に葬られんとする時に迫り、我四隣の光景はナントなく唇亡びて齒寒きの状態を呈しつゝある今日なれば、神儒佛三道が互に力を協せて先天的學說を引立て、以て我國民に忠君愛國の赤心を發揚せしむる急要の時節となりました、其事は諸君に於て造次顛沛の間にも決して忘れてはなりません、余が今回に於ける講義の精神も、歸する所は全く此點にあり、ますから、諸君幸に其意を諒せられたらば、余が本望何事か之れに過ぎませぬ、

破唯物論終

版權
所有

全 明治三十一年二月廿三日印刷
年二月廿七日發行

著作者兼
發行者

井 上 圓 了

印刷者

東京市小石川區原
町十八番地

印刷所

佐久間 衡 治
東京市牛込區市夕谷加
賀町二丁目十二番地

發行所

四 聖 堂

東京小石川區原町
十八番地

定價金參拾錢

76
195

發賣元

東京本郷六丁目 哲學書院

同本郷春木町 文學書房

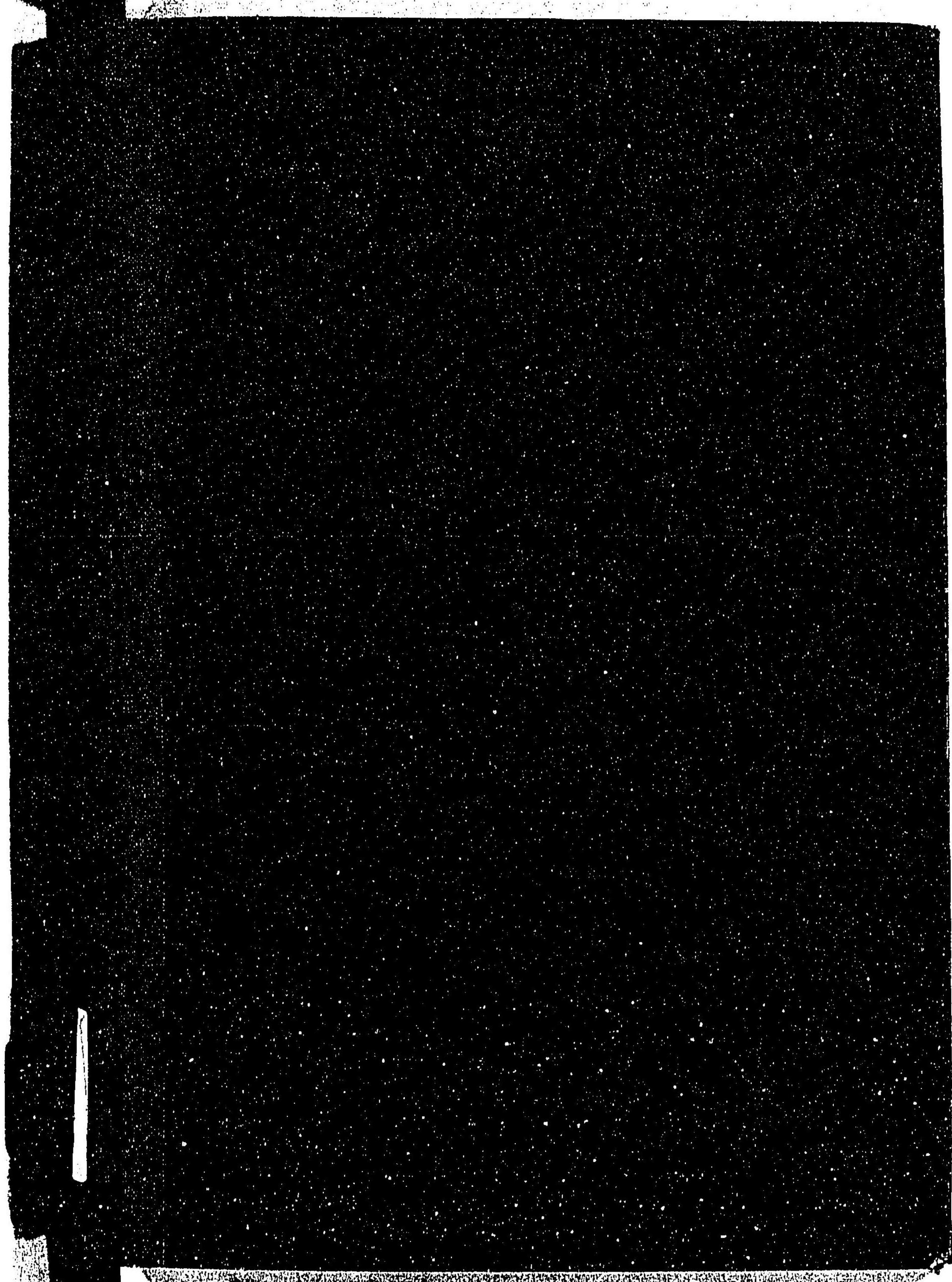
大阪 松村九兵衛

東京 小林新兵衛

熊本 長崎次郎

大賣捌

其他各地書林



76
195

013738-000-2

76-195

破唯物論 一名, 俗論退治

井上 円了/述

M31

ABA-0224



